

茨城県水戸市立見川中学校 (学校長 和田 肩羊)

実施日	平成19年10月31日(火)	時間	午後1時30分～午後5時
実施場所	教室、体育館	対象/人数	3年生 219名
担当教諭	菅原 勝彦	ファシリテーター	根本 久美子
講師	オレリアン・バロン(フランス・県国際交流員) 周 悦(中国・留学生) 板橋 国明(タイ・JICA 筑波国際協力推進員)		

活動内容

- ・分科会 元青年海外協力隊員の体験談、留学を通して感じた異文化体験、CIRから見た茨城、フランスとの文化の違いなどについて
- ・ワークショップ「世界がもし100人の村だったら」

生徒の感想

・世界の国の生活の差がどれほどあるのかということを知ることができました。同じアジアでも、生活の格差がすごいんだと感じました。今、何不自由なく生活できて、いくらでも勉強できることができる大切さを感じ、一日一日を楽しく過ごしたいと思いました。

・実際に体験してみて、世界には貧困に苦しんでいる人が多くいることを知りました。満足のいく授業が受けられないために読み書きができない、住む家がない、食料不足、お金がない、などたくさん問題を抱えている国が存在することも再確認しました。また、開発途上国に先進国が支援してあげられる方法はないのか考えさせられました。私は、貧しい開発途上国側だったので、日本は贅沢で平和な国だと初めて心から思いました。私たちが当たり前だと思っていることが開発途上国の人々から見ればどれほど手の届かない豊かなことなのか・・・相手と同じ目線に立って見たとき、果たして私たちがその人々の苦しみや困難さ分かるだろうか。

・ワークショップを体験して、コップ1杯並々注がれたグループと一口程度しかないというグループがでるといふ大きな差があった。私は世界の人々には、十分に食料が与えられていないことを知った。日本人は当たり前のように食べ物を無駄にしたり、水を無駄にしたりしている。これは、本当に最低なことなんだと思いました。そして、食べ物や水の大切さ、ありがたみを知ることができました。

先生の感想

・実際に体験的な活動を通して学んだことは単なる知識としての糧ではなく、心に働きかけるものがあつたようである。生徒達の感想の中にもあるように、「恵まれた環境に生まれ育つた者」として、話を聞いただけでは分からないことを疑似体

験し、少ないジュースで我慢しなければならない自分と飲みたいだけ飲むことができる友達を目の当たりにすることで、自分たちが何不自由なく過ごしている世界を改めて見つめることができたのではないかと思う。そして、今回のことをきっかけにして世界の情勢に少しでも目を向け、自分たちが諸外国のことについて関わろうとする意識づくりにつながってくればと思う。

成果と課題

・「国際理解教育」に関する学習の中でこれまでに取り立てて何かを実施したという機会がなかったため、今回は英語圏だけでなく他の言語環境の文化に触れ、体験を盛り込んだ経験ができたことは生徒たちにとって新鮮なものであつた。講師の方々が入場された瞬間に場の雰囲気が一変し、生徒たちの興味・関心が掻き立てられたのは言うまでもない。また、今回は初めての試みで、企画・運営に至るまでコーディネーター側にほとんどをお任せにしてしまった。時間の許す限り当日までに綿密な打ち合わせを行い、教師陣が全ての内容・工程を把握し関わることを課題とする。また、今回の生徒の活動から考えると、『学年テーマ「地球市民を目指して～今、私たちにできること～」』に基づいて、「開発途上国の貧困について実情を知ることができ、体験を通して貧困に苦しんでいる人々の気持ちが少しでも分かったような気がする。」という生徒たちの認識は課題の達成ではなく、あくまでも通過点であると捉えて次の課題はどうするか、という「気づき」に視点をおいて展開することが今後の課題である。

